



物語「日本語を話す会」—シンガポール日本人会の宝石箱—

地域社会交流部 日本語を話す会

はじめに

「賢者は歴史に学び愚者は経験に学ぶ」とは19世紀後半にドイツを統一したビスマルクの言葉です。シンガポール日本人会の「日本語を話す会」(英語名“Japanese Speaking Corner”)は地域社会交流部会直属活動グループとして、日本人ボランティアと日本語学習者が土曜日の午後2時から約2時間、日本語で会話(おしゃべり)を楽しむ活動をしています。登録会員は日本語学習者が約70人、日本人ボランティアが約40人で新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大前は毎月第1と第3土曜日に4つのクラスルームで6~8グループ(各グループは10人程度)に分かれて活動していました。

新型コロナパンデミックは経済社会を大きく変えましたが、日本語を話す会の運営も大きく変わりました。クラスルーム活動に人数制限(各ルーム7人程度で合計30人程度)があるため、現在は第2土曜日と第4土曜日がZoomによるオンライン話す会、第1土曜日がクラスルーム話す会という構成で活動しています。オンライン話す会は世界中からの参加が可能で、本帰国した日本人ボランティアやシンガポール駐在から自国や他国に異動した学習者、はたまた日本を含む海外留学中のシンガポール人大学生などが参加して一段と彩りのある活動になっています。



少人数での日本語を話す会活動の様子

〈地域社会交流部発足〉

1991年日本人会に地域社会交流部が発足します。その活動目的は「日本と地域社会との友好親善と相互理解のための交流を促進する」とされましたが、その背景としては「日本人会の行う文化、教育、スポーツなどの交流はその場限りの活動に終わっていた」との反省から、「シンガポール社会との交流をもっと積極的に持続的に果たしてゆく体制作りが求められていたこと」があります。

同部会はJUGAS (Japanese University Graduates Association of Singapore、シンガポール留日卒業生協会)、シンガポール日本文化協会、シンガポール国立大学日本研究学科、教育省外国語センターとのパイプ役も担うことになりました。「日本語を話す会」は1992年に地域社会交流部会が組織化の礎を作り、後に日本語スピーチコンテストも同部会の所管となりました。

〈日本語を話す会発足—日本人駐在女性のボランティア・イノベーションと地域社会交流部会の組織的バックアップ〉

始まりは日本人女性の小さなボランティア精神でした。湯川扶美枝さんが来星前5年間の香港での経験(大学の日本語科学生の会話の相手をする)を足掛かりに、多くのシンガポールの人々と長続きのする交流を行う場として、日本語を仲立ちとする「交流の場」を作ろうというアイデアから、「日本語を話す会」は1992年2月に参加者25名で開始されました。偶然だと思いますが、1942年2月15日のシンガポール陥落(日本軍によるシンガポール占領)からちょうど50年目に当たります。

〈その時、歴史が動いた—1992年5月19日—〉

あるきっかけから5月中旬にシンガポールの中国語新聞「聯合早報」の取材を受け、「日本語を話す会」の写真入り記事が5月19日火曜日に掲載されます。その日は日本人会にある10台の電話は朝から参加希望の申し込みでふさがり、1日で何と350人の申し込みがありました。そして5月25日月曜日にThe Straits Timesに記事が載るに及び、参加希望者の数は660人にまで膨らみました。

ここで当時の地域社会交流部理事と日本人会杉野事務局長のリーダーシップで組織的に対応、最大の課題となったボランティアの確保については日本人学校や当時の渋谷幕張シンガポール校(現在の早稲田渋谷シンガポール校)の先生方及びPTA、一部会員企業の会社ぐるみの協力も得て、6月第1土曜日までには約400人の日本語学習者に対して51人のボランティア・リストができました。日本語学習者とボランティアを奇数週と偶数週の2グループに分け、さくら、オーキッド、富士、ファンクションの4部屋を使った体制で新たなスタートを切りました。このように毎週土曜日に200人以上が集う活動となりましたが、それでも当時の新聞にはまだ200人がウェーティングリストに名前を連ねているとあります。

歴史秘話「日本語を話す会」



さて冒頭の「賢者は歴史に学ぶ」に戻ります。このように楽しく活動を続けている話す会ですが、何時どのような経緯で始まったかなどについて誰も正確に知らないことに気付きました。今後の活動を考える上でも「歴史に学ぶ」ことは大事だと考えました。以下の記述は、2016年12月発刊の「シンガポール日本人社会百年史—星月夜の耀—」発行者シンガポール日本人会、を参考にまた一部引用させて頂きました。

〈1992年の時代背景〉

日本語を話す会への参加希望者殺到の背景には当時の日本語学習ブーム、そして日本の経済金融の拡大するパワーがありました。昨年11月に逝去したエズラ・ヴォーゲル ハーバード大学教授(当時)が1979年に「ジャパン・アズ・ナンバーワン」を出版、また1986年にヒューレット・パッカード社のヤング社長が「競争力協議会」を設立し、産業競争力大統領諮問委員会報告(ヤングレポート)を提出するなどの一連の動きは、まさに勃興する日本の産業や金融を強く意識したものです。

自動車や半導体といった基幹産業での日本の強さは圧倒的で、これに対して米国は日本からの乗用車輸出自主規制などの保護主義政策を展開しました。また1985年9月のニューヨーク プラザホテルに於けるプラザ合意を起点とする急激な円高ドル安は2年3ヶ月で1ドル240円台から120円という過酷なものでした。それでも1991年の日本のGDPは世界の15.3%と米国の6割近くとなり、また豊かさの指標として使われる一人当たりGDPはUS\$28,923と米国を2割近く上回り世界第4位、シンガポール\$14,502(世界第24位)の倍でした。因みに1991年の中国はGDPで日本の11.5%、一人当たりGDPは358ドルと日本の1.2%に過ぎませんでした。

こうした産業経済の圧倒的な強さを反映して、日経平均株価が最高値(3万8915円)を付けた1989年末の世界株式市場時価総額に占める日本の比率は4割に及び、世界の時価総額トップ50社の内32社が日本企業でした。こうした中で、マレーシアのマハティール首相はルックイースト、シンガポールのリー・クワンユー首相はルックジャパンを唱え、日本の驚異的な成功に学ぼうと呼びかけたのです。当時、大学進学率が1割に満たないシンガポール最高学府～シンガポール国立大学(NUS)では、日本語を学ばない者はエリートではないとの風潮まで生み、こぞって日本語学習に取り組んでいたのです。

現在の日本の株式時価総額は世界の7%、時価総額トップ50社にはトヨタ1社のみです。同様に経済規模も世界GDPに占める比率は1991年の15.3%から5.8%に低下、日本に代わって中国の比率は1.8%から16.8%に急拡大しています。また豊かさの指標となる一人当たりGDPは2019年にシンガポールはUS\$65,234と1991年比4.5倍に拡大しましたが、日本は4割増加のUS\$40,256に留まりシンガポールの6割の水準となりました。この間の世界順位はシンガポールが24位から8位に浮上する一方、日本は4位から25位に沈みました。

1992年5月25日(月)The Straits Timesに載った記事の画像は掲載が可能な期間が過ぎましたので取り外しました。

1992年5月25日(月)The Straits Timesに載った記事
Source: The Straits Times © Singapore Press Holdings Limited.
Permission required for reproduction

<p>この度、地域社会交流部が中心となって、シンガポールに住む日本語が話せる外国人のために日本語を話す場を設け、一緒に日本語で話す会を企画いたしました。</p>	<p>第1回目は2月22日(土)の2:00~4:00日本人会で行います。今後第1、第3土曜日に同じく2時から4時まで行いますので、日本語が話せる皆様(日本人会の会友以外の方も可能です)是非ご参加下さい。</p>	<p>Let's Speak Japanese Japanese Speaking Corner</p> <p>Date Starting from 22 Feb 92, (every 1st & 3rd Saturday of the month)</p> <p>Time 2:00pm - 4:00pm</p> <p>Venue The Japanese Association, Singapore.</p> <p>Admission Free of charge.</p> <p>For enquiries, please call Wei Wei at 468-0066 during office hours.</p> <p>ALL ARE WELCOME!!</p>
--	---	---



日本語を話す会より参加者募集案内
(1992年1月号ニュースレターより)

日本語を話す会の発案者、湯川さん(中央)
(1992年4月号ニュースレターより)

〈新型コロナパンデミック前の「日本語を話す会」活動風景〉

1992年設立時の「日本語を話す会」に対するある種の熱狂は、当時の時代背景によるところもあると思いますが、1人の日本人女性の着想を日本人会という組織がバックアップしたことにより30年続く「日本と地域社会との友好親善と相互理解のための交流を促進する」プラットフォームができました。



30年を経た現在も、設立当時から「多くの日本語学習者は日本人と日本語で話す機会を持たない」ことに対し、その機会を提供するというコンセプトは変わっていません。「日本語を話す会」は学校ではなく教科書もありません。あくまでも日本語学習者が日本人とおしゃべりをする会です。こうした交流は日本人会クラスルームでの通常交流に留まらず、グループでの食事会や日本映画鑑賞、地域での文化イベントへの参加と広がっています。夏まつりでの食べ物ブース受け持ちやチンゲイパレード参加も楽しい思い出です。



2014年日本人会クッキングスタジオで料理講習会の様子



2015年日本人会夏まつりでフランクフルト販売の様子



2016年能楽師 杉浦豊彦さんによる能講習会の様子



2013年中秋節を楽しみました

例年大人気の日本料理紹介イベントは、日本人会クッキングスタジオで日本人ボランティア(ここでも活躍するのは女性)指導の下に、参加者がグループに分かれて日本料理を作り食べて楽しむというものです。お好み焼き、冷やし中華、けんちん汁など毎回好評で、参加希望者が多く2部制にしたこともあります。おしゃべりしながら一緒に料理を作り賞味するという人間の幸せの根幹を共感し、参加者は幸せな笑顔で溢れます。その他にも本格的な日本文化紹介としてお能の家元に実演指導を受ける会を設けたり、日本人会同好会とのコラボでお琴の演奏会(試し演奏を含む)や茶道体験、はたまた夏まつりに向けた盆踊り講習会など彩りに溢れる活動をしています。

新型コロナパンデミックにより「日本語を話す会」の活動も大きな制約を受けていますが、一方でオンライン話す会は世界からの参加者という新たな地平を拓きました。今回は「日本語を話す会」の奇跡の歴史を辿り、日本文化とシンガポール及び世界中の文化が混ざり合い、そして多彩な参加者が織りなす場はまさにシンガポール日本人会の宝石箱だにご紹介させて頂きました。

今「日本語を話す会」では、来年の30周年に向けて参加者がさまざまな記念行事の企画を夢想し盛り上がっています。次回はこのような30周年に向けた楽しい企画の一部を紹介し、また彩りあふれる参加者の生の声をお伝えすると共に、次の30年に向けての取り組みなどを考えていきたいと思えます。きっと読者の皆さまも宝石箱の仲間入りしたいと思うようになりますよ。

文責:地域社会交流部 日本語を話す会 吉村一男
写真:日本語を話す会



「日本語を話す会」ではボランティアをしてくださる方を随時募集しています。日本人とローカルの方々の国際文化交流と一緒に楽しみませんか?